

氏 名	井上 貴美 (イノウエ タカミ)		
学 位 の 種 類	博 士 (芸術)		
学 位 記 番 号	甲第7号		
学 位 授 与 日	平成17年3月23日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
論 文 題 目	「作品」と「場」の造り出す関係の変遷とこれからの展望		
審 査 委 員	主査 教 授	本 江 邦 夫	
	副査 教 授	李 禹 煥	
	副査 教 授	堀 浩 哉	
	副査 宇都宮美術館館長	谷 新	

## 内 容 の 要 旨

この論文は「美術作品」と「場」が美術の歴史の中でどのような関係を持ち展開してきたのか、また私の作品は場とどのように関わってきたのかを見、これからの展望を探っていくものである。またここで論じるところの「場」とは、作品が作品として成立する際に必要な周囲空間状況のことを指す。特に作品が制作される前からその設置「場」が念頭にある場合を指している。また昨今では美術作品自体の多様化から「場」の認識もバーチャル(仮想)世界にまでも含むことになる。

「作品」と「場」の関係はルネサンス時代まではそれ程に大きな動きはなかった。美術作品は主に宗教(神)そして神に最も近い存在であった王と結びつき生活に密着していた。

ルネサンス時代、それは人間性の尊重、個人の権利の尊厳、神の世界からの離脱、王権に代表される権力への抵抗、啓蒙思想の萌芽、絵画技術の発達、科学の進歩、と言った現代社会の土台が成型された時代であり、この時代を皮切りに社会体制とそれに伴った美術世界の革新が行われた。次のマニエリスムからバロックに掛けては上記を前提として、絵画の動産化が始まった。こうして「美術作品」は作品が制作される「背景」や設置される「場」の問題が排除され、モダニズム化が進んで行く。こうしてこの後にくる産業革命も手伝い「作品」は商品として流通世界に取り込まれさらに「場」との関係を希薄にしていくが、この流れは印象派以降変化する。

印象派の時代、油絵の具はチューブが開発されることで作家は屋外で制作を始める。眼前の自然感を絵画に表現しようとする中で新たな「作品」と「場」の接点が生まれる。またポスト印象派であるセザンヌを切っ掛けに、作家の織りなす「造形性」だけでも絵画は作品として成立することが可能となって行くが、ここで「場」との関係で重要であったのは作品内における「多視点」の導入だった。これにより一つの作品内に一点透視図法を無視した多くの視点が存在し、様々な異なる空間が一つの画面の中に混在することとなった。こうしたセザンヌの作品に影響を多大に受けたのがキュビズムのピカソだった。

フォーヴィズムにより作家の独自性が重視され実際の空間である「場」そのままの表現が否定され、キュビズムにより対象の「形態の解放」が行われる。ここで新しい表現方法、ピカソによる「コラージュ」とブラックによる「パピエ・コレ」が開発され現実世界との接点が希薄になった画面に現実との接点が復活した。特にコラージュは「もとの文脈に異質なものをぶつけ、対立をおこす」ものだったが、まさにこの技法こそが後の「レディーメイド」「アッサンブラージュ」と言う一連の立体作品を形成していく起源となる。1913年にはデュシャンの丸椅子と自転車の車輪を組み合わせた最初の「レディーメイド」が制作される。

1960年代になるとミニマル・アートが展開するがこれは個人感情や主観性を除き、非遠近的な空間構成で、形態と色彩を最小限まで還元した作品を展開した。マイケル・フリードは1967年にミニマル・アートは純粹視覚性を追求した結果、作品が「演劇性」を帯びてしまうことを述べ、ここにおいて特定の場所と作品との関係性、サイトスペシフィックということが認識されることになる。

こうした美術界において同時期に、既成概念や伝統、そして「美術のための美術」という考え方(正当派モダニズム)に対する反発精神(ダダを起源とする)の高揚が見られ、そうした状況の変化に強く影響を受けた(ミニマルアートを行っていた作家も含め)多くの作家が「場」と関係した「作品」を展開していくことになった。こうしてインスタレーション、アースワーク、エンバイラメント・アート、パブリック・アート、プロセスアートと言った作品群が生じることとなるが、現在(インターネット等のバーチャルな世界も含め)こうした「場」と関係した「作品」のほとんどは「人間社会との関わり」を考えたものであり、この動向は急激に勢いを増している。

歴史を通し様々な「作品」と「場」の関係を見てくることで、現在そして未来の人間にとって「場」と関わる「作品」の重要性が見えてきた。それぞれの「場」につい

て問題提起をし、「作品」が周りの状況と関わっていくことで、作品の意味がより強固に成立するだけでなく、人と人は言うまでもなく、人と社会との繋がりを深めるきっかけが作られていくのだとすれば、そこにまさに(現代の人間が忘れかけている)大地に根ざした頑強な人間性を取り戻すことができる光が有ると言えるのではないか。私はそこに、今日における芸術一般の最大の可能性を見ているのであり、そのような作品を制作していきたい。